

～倅せの土台をつくる～

ftlビジネス・スクールは、働く喜びを感じられる支援を目指します。

=====

関係者の皆様

このメールは、ご挨拶させていただいた方向けに発信させていただいております。

=====

1. 新規利用者募集枠
2. 支援ノートNo.111『障害福祉と科学①』
3. 近況
4. メディア関係案内
5. 研修・講演

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1. 新規利用者募集枠

- ◆ 就労移行支援 ○ 余裕あり
- ◆ 就労継続支援B型 × 来年度については、都度お問い合わせください
- ◆ 生活介護 × なし
- ◆ 就労定着支援 △ ftlの事業所を通過した方のみ利用可
- ◆ 計画相談支援 × ftlの事業所を利用する方以外の受入不可

2. 支援ノートNo.111『障害福祉と科学①』

● 科学的であることのリスク

先日、京都大学大学院工学研究科・工学部が発行している『京都大学工学広報』（2018. 4 No.69）に掲載されている一文を目にした。名誉教授の山岸常人さんが書いた『科学技術と倫理観』というものである。これを読んだ僕は、我が意を得たりと膝を叩いた。要約すると、次のようなことが書かれている。

科学技術は年々精緻になるが、そこには正の側面と負の側面がある。その技術開発に携わる人々は、負の側面を勘案しながら、開発や成果の利用を進めるべきか否か熟慮すべきである。しかし、これは極めて難しい課題であるが故に、各々が倫理観を研ぎ澄まして日々思いをいたすことが重要なのだ。この倫理観は、日常些末な所作に宿るものだ。翻って、技術を生み出す人々のそれを見る限り、基本的な倫理観の欠如した人が大変多く、心許ない。このような状況のなかで生み出される新技術は、人間に何をもたらすのだろうか。改めて自省すべきことである。

山岸さんは、基本的な倫理観の欠如した人の例として、（文章が書かれた当時の）京都大学工学研究科の教職員や学生たちをあげている。彼らは、大学へ向かうバスを待つ停留

所でバスが来るのを待つ間、点字ブロックを埋め尽くして立っているのだという。その彼らが創出するものが、「自分たちの開発した科学技術の人々がどう使うのかについて、その技術と同水準の精緻さをもって考え、創られているはずがない」と、山岸さんは感じたのではないだろうか。この文章に書かれているようなことは、僕らの支援範囲でもよく感じることである。

例えば、インターネットにつながったスマホで買い物ができるのは便利なことであるが、これによって生活が崩壊する人は後を絶たない。昔「つけ買い」と呼ばれたこの行為は、今や衝動のままに実行できてしまう。対人接触や対人交渉というハードル抜きに、手元で手軽に、直感的な操作でできてしまうようになった。就労自立支援において、つけ買いは指導の重点項目であったが、年々教育するのが難しくなっている。人目に触れることなく本人の生活を容易にむしばみ、援助の手が入った時には、すでに自己破産するしかない状態になっていることも希ではない。「借金」も同様で、驚くほど簡単にできる。気がつくと犯罪者になっていることもある。「闇バイト」などと軽い感じで言われるけれど、これは思い切り「実行犯」なのである。失敗に対する堤防の決壊が早くなるのは、物理的な問題と言ってもいいくらいである。判断力に不足のある段階の人たちが自立を目指す過程で、こういった社会問題に巻き込まれているという現実があるのに、教育する側があまりにものんびりしていると云わざるを得ない。似たような例は枚挙にいとまがない。教育者も支援者も、遠大な夢を語る以上は、このような足下の現実から目をそらしてはいけなと思う。

また、支援者の質にも影響がでており、ひいては支援や援助の在りようにも様々な影響を及ぼしている。援助実践において科学的根拠の有無を問うことが流行るのは悪いことではないが、援助者はそれに踊らされ、大切なものを見失っている。

戦略 strategy や戦術 tactic のないところで手元の技術 technic を振り回すような援助者は、科学的根拠があるとされる技術を適時適切に使えず、科学に負ける。科学的根拠があるとされている援助方法をその適応を考えずに使おうとするからである。例えば応用行動分析を活用した援助方法は、援助する相手を全人的にとらえることなく行動の変容に使える便利なものだと考えるのは甚だしい誤謬である。そもそも、浅くて狭い範囲についての行動分析をもって変容できる行動は、同じく浅くて狭い範囲を出るものではない。それがそのままでは現実の込み入った状況に対応できないことは、かの方法による訓練プログラムや教育的アプローチが、援助者によっては逆効果にしかなっていないという結果を見れば明かである。科学的根拠があるとされるこの方法を使った援助に、数え切れないほど多くの失敗例が存在するのは、科学が照らし出せる範囲が、必要な援助範囲のごく一部に過ぎないという事実から考えると当然のことである。

これらを補完し、科学を安全に使えるようにするのは、「経験論的根拠」「直感」「熱意」などという、科学の対極にあるものによる補填であろう。逆もまた然りである。つまり、障害福祉実践に必要なのは、科学に偏ることのリスクを常に考慮に入れた、科学的知見も含む「総合知」「実践知」ではないだろうか。

- 科学とはなにか

ある結果が偶然か必然かを分析するのが科学に課せられたミッションのひとつである。また、分析した結果、必然であるとされるものを法則（再現性のある定式）として現し、多くのことを予測可能な範囲に引き寄せるのも科学である。しかし、科学によって全てが説明できると考えるのは思い上がりである。例えば障害福祉の実践は、無数にある対人相互作用や時代・社会・文化的背景、大小のアクシデントなどの込み入ったパターンが交差しながら展開する複雑系である。諸条件は定量化できず、辛うじて証明できそうな因果関係は極めて浅い水準に限定される。科学的知見とされる理論やモデルは、それが表現された瞬間に新たな推論の構築という作業に晒され、節操もなく早々に書き換えられていく。しかし、この作業をひたすら繰り返して行くのが「科学的」なのであって、このいとなみの外に科学の進歩はない。

仏教の根本的な考えに「諸行無常」というものがある。これはある意味、とても科学的な態度であると思う。見えるもの、聞こえるもの、触れられるもの、臭い、熱など、ひとが五感を通して感じたものが脳の連合野で統合されてできたイメージや記憶も、留まることなく移り変わっていく。特定の小さなパターンにこだわったり、極端に変化を嫌う障害児者は、この原理に抗おうとしているのかもしれない。世の中に完全にランダムなものや、完全に規則的なものはない。ひとは生きていく限り、序破急という大きな揺れのなかにおいて、ロウソクの焰みたいに揺れながらも、ある範囲に留まっている。その大きなリズムやパターンを感じ取れるだけのゆとりがあれば、ひとは不安になったり焦ったりしにくくなる。そういった、小さなパターンを超えた大きなとらえができず安全保障感を得られずにいるのが、こだわる障害児者なのかもしれない。彼らの抵抗は自己破壊へと向かうだけだし、逆にこのこだわりから解かれると、鬱陶しかった顔がさっぱりして、爽やかな表情を見せるようになるのも納得がいく。

僕らの仕事は「相手」のある仕事だ。その「相手」は、科学のように実験対象を動かぬように絞り込んで対象化したものではない。従って、その実践は、科学的実験をして、その結果を記述するのとは、かなりの相違がある。また、その実践を開始するときに立てる仮説も、科学実験のように同一の条件で複数回の実験を行うことはできない。これも、援助するのは「対象」ではなく「相手」だからである。

科学者は、同じ条件下で同じ手続きを踏めば同じ結果がでる確率が高いものを「有意差がある」「再現性がある」とし、それをエビデンスがあるものとして発表する。一方で、援助者は、科学として発表されたものをどう扱うかというところに腕を問われる。援助者がこれを使おうとする段階で、科学的なデータが示しているものとの間に条件の違いが出てしまうので、もはやエビデンス通りの実践にはなり得ないのである。エビデンス通りではないところを埋めるのは、徴候を感じ取り推察する勘であったり、定石というコツであったりする。このことが殆ど身体感覚としてわかっていないと、エビデンスを活用した援助はできず、エビデンスそのままの援助をしてしまい、初期条件の違いから発生するズレを吸収することに失敗し、痛い目にあう。科学的根拠を持った援助とは、科学的に根拠があるとされるものをそのまま当てはめる関わりのことではない。

科学＝援助であってはならない理由は、科学とは何かを考えてみればわかる。障害福祉とは、相手が幸せに生きることを目的とするが、科学はそこに拘泥しない。「幸せ」を科学の一義的な目的にすることは論理的にあり得ない。従って、科学的に証明されているこ

とは、その使い方によって、人間を不幸のどん底に陥れることもできる。最先端の科学技術を惜しみなく注ぎ込んだ殺人兵器は、その代表格であろう。もっと身近な、例えば自動車のようなものだって同じである。どのような戦略をもってこれを使うかによって、天国と地獄ほどの差がでてしまうという意味では一緒である。

それでは、このような悲惨なことにならないようにするには、何が必要だろうか。障害福祉の実践が科学を使うときは、それを統制するための倫理が必要になる。刹那的な快ではなく、大局観として幸せに向かう生を確認する姿勢が、大きな枠組みとして在るべきだ。これは、むき出しの科学と福祉実践との間にある大きな違いである。倫理は科学に優先する。倫理的に考えれば、科学的な根拠がなくても経験論的に使えるものは使うべきである。これが、科学に負けない福祉の在りようではないだろうか。

もう一つ理由がある。科学の実験は再現性を求める。その準備として相手を徹底的に対象化（相手ではなく対象に）する。逆に、福祉の実践は再現性がない。福祉実践には必ず変化して止まない「相手」がいるからだ。科学的根拠を得るのに必要なのは、変化して止まない、予想外の動きをする「相手」ではなく、相手を超高速シャッターで撮影して変化しなくなった1枚の写真をピン止めして固定したような「対象」である。その証拠に、科学的とされる実験も統計も、相手を絞り込んで対象化するではないか。翻って、福祉実践という生々しい現実の中でこれを行うことは不可能である。そういう意味で、福祉は本質的に科学ではない。現実の生活という、科学で説明しきれない場の中にある。

もう少し具体的に考えてみよう。障害福祉や精神医学・心理学の分野でよく参照される心理・知能検査はどうか。こころという変化して止まないものを数量化して見せるのが心理検査であるから、一見すると科学のようである。しかし、本来、数量化するための条件は対象の質を同一に固定することである。質的に異なる領域のものを区々に検査して、これを最終的に（強引に）ひとつにまとめあげるのだから、その結果を科学的根拠としているものかどうかは疑わしさが残る。特に知能“Full Score Intelligent (FSIQ)”となると、怪しげで、例えばウエクスラー式の知能検査レポートに「90%信頼区間 FSIQ=90-101」と記されていれば、そのころは「信頼度は90%で、知能指数は90~101の間に位置すると推定される」となり、随分と自信がなさそうに聞こえるではないか。こうなってくると、あくまでも一面的な観察と解釈であると思って使わなければ危なっかしい。従って、僕はこの数値を「この人の知能指数は、最低でも90~101、場合によってはもっと高いかもしれない」という風に読み直すことにしている。しかし、ここにもネックがある。そもそも、検査者がひとである以上、その検査結果には検査者と被験者との関係が必ず反映されるし、検査・解釈をする際にも、熟練やスキルというものが深く関わるという事実からは逃れられない。どんなに精緻なマニュアルを検査者に読ませて実行させたとして、その程度の努力でテストの初期条件が一定になるのかと問われれば、一定にはなり得ないと答えざるを得ないだろう。つまり、これを科学と言っていいのかどうかというと、違うとまでは言わないけれど、あやしいものだと思う。ましてや投影法の検査ともなれば、どうだろうか。もちろん、だからといって検査は不要だと言うつもりはない。要するに、ウエクスラー式検査の例で言えば、「90%の信頼度だから、目の前にいる人は10%のほうに入る可能性がある」ということを絶対に忘れないという態度が大事なのだ。検査結果を活用する時の心構えとして、検査結果を読み解く時は、眉に唾をつけてからにしましょう、ということであ

る。

科学の柱だと言われる統計的方法も、福祉実践の現場（つまり、実際の生活そのもの）とはかけ離れている。統計的方法が信憑性をもつためには、母集団を均質化する必要がある。そのためには、ランダムサンプリングや二重盲検法などで対象をどうにかこうにか均質化するしかない。しかも、そういった努力によって対象をどこまで均質化できているのかというと、これも疑わしい。これだけやっているのだから、均質である確立が高いというだけの話である。母集団の100%均質化が不可能である以上、その信憑性に揺らぎが生じることは避けられない。そこから取れるデータは、科学的傾向はあるにせよ、どこか現実離れする。従って、これもまた、そのまま鵜呑みにする形で福祉実践（生活）に取り込むことはできず、参考の範囲を出ない。全数検査という方法もあるが、これとて母集団は限られているのであり、その範囲に限られた「全数」である以上、全てを調べ尽くしているわけではない。「当該母集団の範囲に限って言えば」という限定から逃れられない以上、そこから得られるエビデンスは、どこまでいっても参考値である。「目の前にいるひとは、小数群に入るかもしれない」という可能性への敏感さを持たない支援者が、現場で使いものにならないのは、容易くこの穴に落ちるからである。

科学には、事例を丹念に読み解くという形のアプローチもある。事例から推論する方法は、福祉の実践現場に最も親和性が高い。実際にやってみるとわかることだが、事例研究というのは過去を丹念に調べて相手の人柄を探るため、小説を読み解くようなところがある。人柄をつかもうとするために、0歳から現在に至るまでを調べるというのは当たり前で、場合によっては祖父母の代まで調べることもある。無数の軸をもって社会背景・家族・学校・その他と本人との間にある前後関係・因果関係・相関関係を読み解いていく。他の事例と照らし合わせながら推論をたてるが、全く同じ事例はない。また、新たな推論を構築することを繰り返すこと、目的や願望から物事を解釈したくなることに対して禁欲的になることなどが強く求められる。これがなければ、読み深めた物語はフィクションの域を出ない。楽しみや息抜きで小説を読むことと、プロとして科学的事例研究を行うこととの違いであろう。

● 科学はどこまで科学的でありうるか

科学とは何かを突き詰めていくと、科学はどこまで科学的になり得るかという疑問に突き当たる。

第一の疑問は、データの正確さについてである。お湯の温度を正確に測ろうとしても、お湯が大気や温度計に触れた瞬間から、お湯の温度は変化してしまう。“熱力学第二法則”である。従って、ある瞬間におけるお湯の温度を正確に測るためには、大気や温度計をあらかじめ計測対象のお湯と全く同じ温度にしておいた上で計測しなければいけないというおかしなことになる。従って、時遅れのデータを参考に、その他の情報を総合して、直感的に察するしかないということになる。情報として得られるデータは、常に時遅れだからである。もちろん、相手がお湯ではなく、ひとだとしても同じことである。直感は経験によって磨かれる。将棋に例えるとわかりやすい。経験とは棋譜のようなものであり、直感は棋譜の丸暗記ではない。丸暗記した棋譜で100%勝てるのであれば、対局する前から勝

敗は分かっているのだから、勝負する必要はなくなり、将棋という分野そのものが消滅するだろう。スポーツも然り。障害福祉も然りである。

第二の疑問は、観測者の関与が結果に与える影響の問題である。科学的な観測は、「観測する者と観測対象」という関係をしつらえることで成り立つ。しかし、ここに疑問が生じる。観測者は観測対象に誘われて観測している身であり、その解釈に両者の関係性が影響しないわけがない。科学における観測者は、対象から誘われるようにして結果を解釈する者であるという立ち位置から逃れられない。換言すると、どんなに立派な科学者であっても、徹底して観測者になることはできず、対象からの誘いに乗って観測を始めるという事情からは逃れられない。対象に何の魅力も感じなければ、科学者はその対象を見ようとはせず、研究のいとぐちを見つけることもない。コペルニクスは占星術師（星占い師）であった。その彼が世の常識を覆す科学的な大発見をしたことは興味深い事実であり、占いと科学を同一線上に並べて考えてみるヒントになる。江戸時代の狐憑き治療者だって、腕のいい者はけっこう科学的だったのではないかと僕は思う。科学による非科学の批難ないしその逆は、不毛な議論として慎むべきであろう。

第三の疑問は、少数群についての科学的接近が弱すぎるということである。科学という方法論は、一団体にしか現れない差異については取り扱わない傾向がある。科学はあくまでも有意な違いをみようとする。しかし、少数群もまた、個々には他と同じ重さを持つ。少数群問題に科学が取り組まない理由は、「お金にならないから」という経済的な理由もあるし、「研究者の地位が上がらない」という欲の問題もからんでいる。利権につながらないと動かないという倫理観の薄さも原因のひとつであろう。

強引にまとめるならば、科学的手法自体は徹底的な科学にはなり得ないということである。敢えて言うなら、そこから抽出される情報は「科学的傾向」があるということに過ぎない。どんな実践であっても、それが実践である以上、科学度が高いとか低いとかいうスペクトラムの中にいるのであり、科学度100%ということはある得ないのではないか。

● 科学の使い方

川の流れに必ず反流が生じるのと同じく、ひとがひとと会うところにも必ず対人相互作用が生じる。これが微塵も発生しないということはある得ない。平穩無事な時間を過ごしていても、反流は常に発生している。河川に氾濫が起きていない時というのは、この反流が絶えず予測不能な姿を現しつつも、氾濫しない範囲内に収まっている状態なのであって、明鏡止水の如き状態ではない。ロウソクの焰みたいに絶えず予測不能な揺れを示しながら、一定の範囲に収まっている状態である。ひとの生活も、対人関係も同じである。刺激を統制した人工的環境設定をしたとしても、あるいは、関わらない（タイムアウト）という手段をとろうとも、相手にしてみるとそれは「関わらないという関わり方をされた」のであり、無にはならない。

30年位前からだと思うが、障害児者への援助技法として、非常に浅い層の因果関係のみをとらえた刺激と反応の分析が流行し、これが科学の顔をしてまかり通るようになった。それらは、その場その場における瞬間的効果はあっても、人格形成のような大きな物語を見失わせる弊害もある。本来は、大きな目標を本人と共有しながら、そこに達するまでの

細かい目標設定をし、瞬時的効果が目標に向かって連鎖していくように援助すべきなのだが、そういった神髄の部分は忘れられ、目先のことのみに反応した支援もどきになっていることが多い。大きな目標を本人との間で共有し、一緒にそこへ向かっていくときに、それがどういう目標であるかということこそ、倫理のフィルターを通すべきである。ちなみに、この類いの支援による被害者は、30年を経た今、数限りなく存在している。これを放置しておくことが倫理的に許されるのかという議論は、狭く障害福祉の範囲に留めるのではなく、社会全体ですべきことである。旧優生保護法下で、強制的に不妊手術を受けさせられたひとたちと、質的に同じであり、量的にはこれをはるかに上回る事件だと思う。

その中でも多数あるのが、援助者・養育者・教育者が、問題行動対策という名目で必要以上に刺激を制限して反応を抑えようとした結果、相手の時間から目鼻やリズムを奪い、今どきの様な状況にあるのかをわからなくさせてしまう失敗である。このような愚行を重ねている施設は今なお多く、反省もなく増えていく傾向すらある。彼らはずいぶん大局を見ることができなくなり、近視眼的に小さなパターンのみを追いかけて繰り返すしかなくなる。大局観の欠如は、支援する側にも受ける側にも同様に起こる。支援者は、その（本質的に役立たずな）作業を繰り返しても給料を得られるから、このどうでもよい作業は継続されていく。しかし、このような支援を受ける側はどうか。人生を棒に振る可能性があるのではないか。実際、このような支援の犠牲となった知的・発達障害児者をどれだけ多く見てきたことか。

input を減らすと output も減る。これを援助の現場に持ち込んだのが、タイムアウトのような技法である。単純なことであるが、これが科学的根拠ありとされ、カタカナで表記されて、エビデンスに基づいた支援として広まった。しかし、そこには30年後を見据える大局観がなかった。保護という名の下に科学的根拠をもって処遇されたひとたちは、人間的な魅力を摩耗させながら暮らすことになり、ひととしての多くの機能を奪われるに至った。

ひとは刺激や変化に意識を支えられて生きている。外界からの適度な刺激がないと、思考が乱れたり、身体的な違和感を生じたりすることは、それぞれ科学的に証明されている。必要以上に刺激を減らすことを続けると、本人は意識を保てなくなるだけでなく、こころが痩せて、生きる意味や目的といった「人生の大局観」のようなものをも失ってしまう。このような状態になると、不安が強くなり、小さな徴候や変化という刺激に対して鋭敏な反応を示すようになる。そして、その反応は指数関数的に増幅し、パニックや自傷・他害に至る。当然、この段階に至ったひとへの薬物療法は無効である。なぜなら、彼は最後まで意識を取り戻そうとして必死の抵抗を試みるからである。外科手術の全身麻酔に匹敵するほどの薬を飲んでも、狙ったような効果はでない。本人が薬を飲むことに賛成していないのだから、当たり前ではないか。

「強度行動障害」と名付けられた人の状態像は、このようにしてできあがることが多い。

ひとの生には、序破急や起承転結と呼ばれるリズムがある。これは、生きている者の歩みを進めるための指針になる大きなパターンである。支援全体を見渡した時に、倫理的な問いかけを最も高い濃度で求められるところが、この大きなリズムづくりへの支援であろう。また、支援者にリズムをとらえる力量がなければ、加速する過程と加速してはならぬ

い過程の区別がつかず、状況に応じた適切な援助はできない。このように、広大な範囲がある文脈をもってカバーしようとする支援観・倫理観が基礎要件になっている職業の代表が障害福祉であると、僕は勝手に規定している。しかし、これは孤独な規定である。

僕は、支援・援助の実践に科学的根拠という隠し味を添えることについて賛成している。それは、科学が不確定な部分を最小にしようとするからである。但し、実際の支援というものは、科学的に説明しきれない定石や大局観が必要である。こういった要素が色濃くあることを意識せずに、その場限りの「科学的根拠に基づいた援助」を繰り返すのなら、これは倫理的に間違っていると思う。科学においては「〇〇すべき」「××してはならない」が、論理的に導きだされない。従って、科学を福祉実践に役立てるのであれば、倫理による統治が必要条件になる。その倫理とは、「相手の人間的な魅力を最大限に引き出して生きていけるように支援すること」と表現してもいいかもしれない。

ところで、『社会福祉士及び介護福祉士法』や『精神保健福祉士法』に、こういったことは明記されているのだろうか。

つづく

令和6年11月16日 高原浩

※ 支援ノートの文章は、事例として挙げられている人が特定されないように配慮されており、趣旨が変わらない範囲で名前や場所などの事実を加工してあります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

3. 近況

【就労移行支援 ftlビジネス・スクール】 新規利用者募集中

知的障害（知的発達症）を含む発達障害（神経発達症）のかたたちがメンバーの中心になっています。眠くなるような講義ではなく、援助を受けながら社会参加する体験を通して、企業就労と社会参加に必要な心構えやスキルを身につけています。就職先とのマッチングは、利用期間中の体験的かつ実践的な体験を援助者と利用者として分かち合いながら訓練することを目指します。

チームとして協力し合い、折り合う体験を積む中で、個々に違う、ボトルネックとなっている課題を明確にします。具体的な傾向と対策をたて、就職に向けての援助を行います。

就職後に成長できる適職場に就けるような余裕を作ることを目標に、利用開始段階から多角的な評価と見立てをしっかりと行います。また、就職後には、継続して就労定着支援（通常3年6ヶ月）を利用し、安定就労や自立に向けての援助や助言を受けることができます。

就労定着支援終了後も、OB会などを通じて、繋がりを大切にしています。ftlのほうから繋がりを切ることはしません。

令和7年3月に特別支援学校高等部・高等学校・専門学校・大学などを卒業される方の利用枠もあります。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

【就労継続支援B型 ftlビー・ワーク】 随時お問い合わせください(現在定員オーバー)

当事業所は、じっくりと腰を据えて就職を目指す方を対象にしたB型運営をしています。中長期的に企業就労を明確な目標にしている方にフィットしている事業所です。ftl就労移行支援のクオリティーはそのままに、就労継続支援B型の制度を利用して就職と自立に向けての援助を行っています。

また、将来的にftlの就労移行支援を使いたいという方にもお勧めです。日中、社会的役割を得て仲間と共に働くということを中心に据えながら、生活リズムと様々なライフスキルを整え、張りのある生活ができるように、日々の援助をしていきます。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

工賃収入を得て、社会参加していることを実感しながら過ごせる環境は、自尊心を下げることが防ぎ、働き暮らすスキルと自信をつけます。

【発達保障型生活介護事業 ftlビー・ワーク】 見学可(現在定員オーバー)

発達保障の理念を掲げ、社会参加の手段として『働くこと』をベースにした生活介護事業所です。利用者は皆、社会の中に役割を持ち、工賃も稼ぎます。糸賀一雄さんの言葉「この子らを世の光に」を実践したいという想いと共に始まり、若々しいメンバーが、仲間意識を持ち、張り切って仕事に就いています。療育的な視点を持って成長発達を保障することを目的とした事業所です。基礎的な力がついた方については、就労移行支援や就労継続支援B型の現場で実習する機会を設けています。また、働くだけでなく、一体感を楽しみながらの仲間作り、生活技能習得プログラムや地域のかたたちといっしょに活動するプログラムも実施しています。

<http://www.ftl-1.co.jp/lp/lifecare/>

【就労定着支援事業】 ftlの事業所を通過した方のみ利用可

就労移行支援や就労継続支援を使った後に企業へと就職した方たちを対象にした、職場への定着支援事業です。人となりをつかんだ上での、テーラーメイドの就労定着支援です。

<https://1drv.ms/b/s!Ah7JHDWO-znfx3thUQpVzZLqFVL7?e=kVqNYL>

【計画相談支援 ftlアクセス】 ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止しております

児童・成人とも対象にしております。フォーマルな障害福祉サービスを使う方を対象に、サービス利用計画を作成したり、様々な生活相談に応じる支援を行います。

* 土曜プログラム・特別プログラムについて (ftlの就労移行支援・就労継続支援B型利用者が対象です)

土曜日に行われるプログラムです。以下が、プログラムの例になります。

① どだいの会 (動作や感覚の統合・状況判断能力・社会性の発達を目指すトレーニング)
社会適応の障害になり得る発達の遅れは、脊椎を中心にした身体図式、身体の基本動作、感覚器の使用、記憶と操作、指示理解と把持などが大きな要素になって形成されます。どだいの会では、楽しみながら身体動作の状態を確認し、個別訓練メニューを考えたときの

ヒントとして現場へとフィードバックします。まさに、就労自立の土台になる活動です。

② ICT教室（PC技能訓練）

WordやExcelの使用方法を中心に、基礎から学びます。あわせて、事務的な作業指示に対する理解度を確認し、傾向と対策をつかみます。働き始めたときに役立つ様に、メンバーの段階に合わせてプログラム設定を行います。ソーシャルスキルの訓練にもなります。

③「和太鼓講習」

市民グループ『富士見太鼓の会』様の稽古に参加しながら、和太鼓を楽しみ学びます。

<https://www.fujimitaiko.com/>

和太鼓の良さは次のような点にあります。

- 音階がなく、強弱とリズムで表現するため、わかりやすい
- 耳よりも身体全体で感じる音であるため、認識能力の差があっても共有しやすい。非言語コミュニケーション能力が育つ。
- アイコンタクトをとり、息を合わせて全員でひとつの曲を演奏するため、仲間との一体感や、場を分かちあう感覚を楽しみながら得られる。
- 腰を入れた動作を主としており、随意筋と不随意筋を協調させる運動である。

④専門講師による特別プログラム

就労自立を達成するために必要な知識をワーク形式で身につけていく場です。社会生活を維持するために不可欠な内容が中心になります。オープンな雰囲気、楽しく真剣に学びます。

⑤“自立講座”“OBとの交流会”等

就労自立生活の実際について、専門家や経験豊富な職員が、利用者の皆さんにわかりやすく説明します。OBとの交流会では、ftlから就職した先輩たちが、今活躍している職場や仕事の説明をしてくれます。それを題材に就職についての理解と意識を深める場になります。どれも、絆を深め、就労自立に向けての意欲や意識を高める大切な時間になります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

4. メディア関係案内（全て、全国の書店やインターネットから購入できます）

○『家族で支援する発達障害 自立した進学と就労を進める本』 高原浩 監修
河出書房新社

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309254524/>

選択肢が増えたように見えて、実は問題点も多い進学と就労について、現実の課題をわかりやすく解説した上で、自立した選択ができるようになるための実践的な情報を伝えます。

○『現場発！知的・発達障害者の就労・自立支援』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034370.html>

重版（3刷）好評発売中です。

○『飼い殺しさせないための支援』 高原浩 著 河出書房新社

*全国学校図書館協議会選定図書に選定されています。

<http://ap27.eurotec.ne.jp/np/isbn/9784309248943/>

○『現場発！ソーシャル・インクルージブとインクルージブ教育』高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034212.html>

著者の体験談を基に、ソーシャル・インクルージョンを障害福祉の現場から具体的に問い、インクルージブ教育を教育現場の実践者との対談を通じて考える本です。障害福祉の本質に迫ります。日本教育新聞の書評に掲載されています。

<https://www.kyoiku-press.com/post-211922/>

○ジョブメドレーアカデミー オンライン研修講師として登壇中（下記リンクは、案内のみです）

『個別支援計画と支援方針の立て方～就労支援編～』

『サービス管理責任者向け研修』

<https://jm-academy.jp/syougai-fukushi>

○NPO法人 日本インクルージブ教育研究所 多様な発想支援士養成講座

『対人援助のコツ ～非施設的实践の現場から～』

<https://x.gd/TaltY>

<https://www.jiei.org/tayounahassou/step4itoshi/#1-3>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

5. 研修・講演について

- 通年 神奈川県立中井やまゆり園 支援改善アドバイザー
- 令和6年9月21日 社会福祉法人 朔日 NPO法人 朔日の会 児童・成人部門 職員研修
- 令和6年11月22日 東京福祉専門学校学生実習受け入れ①
- 令和6年11月29日 東京福祉専門学校学生実習受け入れ②
- 令和6年12月6日 東京福祉専門学校学生実習受け入れ③
- 令和6年12月13日 東京福祉専門学校学生実習受け入れ④
- 令和6年1月14日 社会福祉法人 武蔵野 職員研修

研修講師・講演のご依頼につきましては、直接お電話いただくか、メールまたは以下のお問い合わせフォームからどうぞ。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

<http://www.ftl-1.co.jp/>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

令和6年11月16日
ftlビジネス・スクール/ftlビー・ワーク
サービス管理責任者 高原浩